

養育者への夫からのサポートと内的作業モデルの関連

Social Support and Internal Working Model of a husband

門井香子・富永洸太・渡辺なほ

(東京成徳大学大学院)

石崎 一記

(東京成徳大学)

Kaoriko KADOI (Graduate School of Psychology, Tokyo Seitoku University)

Kota TOMINAGA (Graduate School of Psychology, Tokyo Seitoku University)

Naho WATANABE (Graduate School of Psychology, Tokyo Seitoku University)

Kazuki ISHIZAKI (Tokyo Seitoku University)

要 約

本研究では、内的作業モデル (Internal Working Model: IWM) の更新要因を探ることを目的とし、乳幼児の養育者に注目し、IWM と夫からのサポートの関係を検討した。結果、出産・育児による IWM の可塑性の少なさを改めて証明する結果となった。しかしながら、全体の12%において IWM の変化が確認されたことから、IWM のある程度の可塑性があることが示された。さらに、更新要因の検討においては、夫からのサポートは安定した IWM の維持要因にはなりえるが、不安定な IWM を安定したものに更新する要因としての効果は認められなかった。一方で、夫婦関係が IWM を安定したものに更新する要因となる可能性が明らかとなった。

キーワード: 内的作業モデル、夫からのサポート、夫婦関係

I. 問題と目的

本研究では、内的作業モデル (Internal Working Model: 以下 IWM) の変化に注目し、研究を行った。IWM とは、Bowlby (1969/1976) が提唱したモデルであり、“子どもは愛着対象との日々の具体的相互作用を通じて、愛着対象への近接可能性、および愛着対象への情緒的応答性に関する情報を統合し、他者や自己への関係性の表象を形成する”とした。

Bowlby (1969/1976) は、IWM 変容の可能性を示唆しながらも、人生初期の6ヶ月から5歳

くらいまでにモデルが形成されるとし、漸次的にスタイルの安定性が増し、可塑性が減少し、人格の同質性が保たれることを強調している。

このように IWM に可塑性が低いとされている IWM だが、それに対して、更新の可能性とその要因に関する研究も行われている。先行研究において、IWM の更新要因として、愛着対象の喪失 (Weinfield et al, 2000) や調和的な関わり (安藤・遠藤, 2005) といった関係を通じて、IWM の再構築が成されることが明らかになっている。また、Main (1991) は、思春期以降のメタ認知機能の発達によって、成人期においても被養育者

体験の再評価が行われるため、IWMの再構築が可能であるとしている。このIWMの再構築と客観的認知の促進というIWMの更新要因を含んだライフイベントとして子育てが考えられる。

加藤(2007)は、子育て期の養育者を対象に、重要な他者からのサポートがIWMの変化に及ぼす影響について研究しており、そこではIWMの可塑性が低いことが明らかになっているが、高い幸福感がIWMの変化と関係していること可能性が示唆されている。加藤(2007)の研究においては、重要な他者からのサポートをIWMの更新要因としていたが、対象別のサポートの影響についての検討がなされておらず、どの対象からのサポートがIWMの更新要因となりうるのか、検討する必要がある。そこで、本研究においては、重要な他者を養育者の夫に限定し、夫からのサポートと夫婦関係をIWMの要因として予測し、研究を行う。これは、夫が養育者にとっての愛着対象になりうる存在であり、夫との調和的な関係が、IWMの変化の要因になっている可能性が考えられるからである。さらに、ライフイベントとしての子育てをテーマに、子育てにとって重要な他者を夫に特定した研究がほとんどなされていないことから必要性が考えられる。

このことから本研究では、IWM更新の要因を探るため、子育て期の養育者を対象に、夫からのサポートとIWMの変化の関係を検討する。

II. 方 法

1. 調査時期と対象者

調査時期は2009年7月。調査対象は、幼稚園に子どもを預けている3～6歳の子どもをもつ母親300名に質問紙を配布。189名の母親から回答を得た(回収率63%)。

2. 調査方法

都内の幼稚園に調査協力を依頼し、学級担任に

よって質問紙の配布・回収を行った。質問紙には、統計的に処理すること、強制ではないことを明記した。

3. 調査内容

フェイスシート 母親の年齢、子どもの数、子どもの年齢、性別、また、幼稚園の子供の所属クラス(年少・年中・年長)の回答を求めた。

IWM測定 中尾・加藤(2004)が作成したECR日本語版を使用した。下位因子は、“見捨てられ不安”に関する9項目と“親密性の回避”に関する17項目の2因子からなる計26項目で構成されており、中尾・加藤(2004)により、信頼性、妥当性の検討がなされている。ECR日本語版は、質問項目の中に重要な人物としてイメージしやすい“恋人”という表記が多く使われている。しかし、本研究において、夫に対するIWMの測定を考えているため、“恋人”を“夫”と置き換えた質問文に変更した。

さらに、本研究では更新という観点から、出産前と現在の変化に注目することから、各質問項目に対して、回想法により“出産前の気持ち”と“現在の気持ち”についての評定を求めた。本研究の回答方法は、質問の項目に対して、5件法(5:非常に当てはまる～1:全く当てはまらない)で回答を求めた。

ソーシャルサポート 加藤(2007)が作成したソーシャルサポート尺度を修正して使用した。子育てする上で、夫がどの程度自分を支援してくれるかに関する6項目を(5:非常に当てはまる～1:全く当てはまらない)で評定してもらった。

夫婦関係 諸井(1996)が作成した夫婦関係満足度尺度を使用した。この得点が高いほど、夫婦関係に満足しているといえる。

III. 結果

1. ECR 日本語版の検討

中尾・加藤（2004）が作成した質問項目を一部修正した為、構造が保たれているか確かめるために確認的因子分析を行った。その結果、親密性の回避15項目、見捨てられ不安8項目を抽出し、加藤（2007）と同様の構造を確認した。その後、クロンバックの α 係数を算出したところ、出産前 ECR の親密性の回避因子は $\alpha = .92$ 、見捨てられ不安因子は $\alpha = .88$ となり、出産後の ECR の場合は親密性の回避因子は $\alpha = .95$ 、見捨てられ不安因子は $\alpha = .88$ となり、十分な信頼性が確認された。

2. 出産前と現在のIWMの変化

子どもの所属クラスと出生順による影響を検討するために、子どもの所属クラス・出生順を独立変数、ECR 尺度の下位尺度得点を従属変数とする2要因の分散分析を行った。その結果、主効果及び交互作用はみられなかった。よって、ECR 得点を、子どもの年齢、出生順位による影響を想定せず同一のものとして分析を行った。

さらに、出産前と現在の ECR 得点において対応のあるt検定を行った結果、出産前に比べて現在の親密性の回避は有意に高かった ($t(163) = 3.91, p < .001$) が、見捨てられ不安については、有意な差がみられなかった。このことから、親密性回避において現在の得点の方が高く、現在の IWM は、出産前に比べ不安定であると認知していることが示された。

3. IWM スタイルの分類と変化

IWM スタイルを分類するために、親密性回避と見捨てられ不安得点を用いた Ward 法によるクラスター分析を行い、対象者を4群に分類した。ただし、この2因子は質問項目数に差があるため、尺度得点をz得点に換算し使用した。また、出産

前と現在の得点間で有意差が認められているため、出産前と現在の回答を別ケースとみなし、328ケースを対象に分析を行った (Figure 1)。

クラスターの分類後、328ケースを264名の対象者の出産前と現在の回算出された4つのクラスターの特徴を把握するため、クラスター(1、2、3、4)を独立変数とし、親密性の回避と見捨てられ不安の合計得点をそれぞれ従属変数とする1要因4水準の分散分析を行った。その結果、安定型・とらわれ型・拒絶型・恐れ型に分類された。 χ^2 検定の結果、IWM スタイルの偏りに有意差がみられた ($\chi^2(9) = 161.9, p < .001$)。その後の残差分析の結果から、IWM スタイルが維持された群の偏りが有意に高かった (Table 1)。

4. IWM の変化と夫からのサポート・夫婦関係満足度との関連の検討

IWM の偏りがみられるため、分析しやすいように、安定型・不安定型(拒絶型・とらわれ型・恐れ型をひとつにまとめた)の2分類を使用した。安定維持群・不安定維持群・更新群・衰退群に分類し、夫からのサポート(道具的、情動的、情緒的、評価的、コンパニオンシップ、満足度)との分散分析を行った。結果、すべてにおいて主効果が認められた(道具的サポート ($F(3,160) = 4.04, p < .01$)、情動的サポート ($F(3,160) = 2.78, p < .05$)、

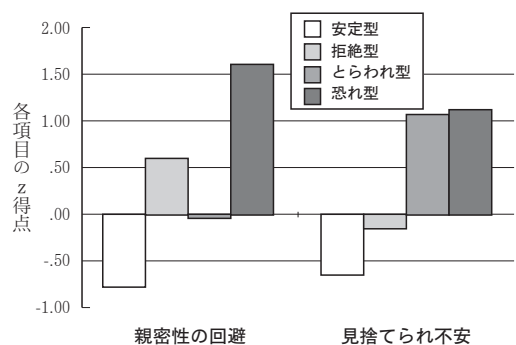


Figure 1 クラスターごとの各因子得点

Table 1 出産前と現在のIWMスタイル（調整済、残差）

		現在クラス				合計人数	
		安定	とらわれ	拒否	恐れ		
出産前クラス	安定	人数	65**	7**	5**	2**	79
		調整済み残差	9.7	-3.5	-3.5	-5.3	
	とらわれ	人数	3**	18**	7	8	36
		調整済み残差	-4.8	5.1	0.4	0.5	
	拒否	人数	3**	6	16**	6	31
		調整済み残差	-4.2	-0.1	5.7	0	
	恐れ	人数	0**	2	0*	16**	18
		調整済み残差	-3.9	-1	-2	7.9	
	合計人数		71	33	28	32	164

注) ** $p<.01$, * $p<.05$

Table 2 IWMスタイルの変化別夫によるサポート得点（標準偏差）

	安定維持 (N=64)	不安定維持 (N=78)	更新 (N=8)	衰退 (N=14)	F 値
道具的	4.39 (0.97)	3.17 (1.18)	4.25 (1.17)	4.07 (1.54)	4.04**
情動的	3.59 (1.31)	2.95 (1.33)	3.50 (1.41)	3.07 (1.33)	2.78*
情緒的	4.48 (0.89)	3.50 (1.23)	4.25 (1.04)	3.86 (1.46)	8.57***
評価的	4.33 (0.84)	3.53 (1.16)	3.25 (0.89)	4.00 (1.18)	7.38***
コンパ	4.11 (0.96)	3.00 (1.17)	3.63 (0.74)	2.93 (1.07)	13.29***
満足	4.17 (1.02)	3.22 (1.29)	3.75 (1.28)	3.00 (1.30)	9.92***
夫婦関係	20.97 (2.97)	16.50 (3.71)	21.63 (3.42)	16.29 (4.05)	23.91***

注) *** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$

情緒的サポート ($F(3,160)=8.57$, $p<.001$)、評価的サポート ($F(3,160)=7.38$, $p<.001$)、コンパニオンシップ ($F(3,160)=13.29$, $p<.001$)、サポート満足度 ($F(3,160)=9.92$, $p<.001$)。その後の多重比較の結果、安定群は不安定群に比べ、すべてのサポート得点が有意に高かった。安定群は衰退群に比べ、コンパニオンシップ得点と満足度得点が有意に高かった。IWMの変化と夫婦関係満足度の関係の検討は、1要因4水準の分散分析を行った結果、有意な主効果を確認した。その後の多重比較安定群は不安定群、衰退群に比べ、満足度得点が有意に高かった。

IV. 考察と展望

本研究では、IWM更新可能性とその要因を採

るため、子育て期の養育者を対象に、夫からのサポートとIWMの変化の関係を検討した。結果としては、加藤(2007)による研究同様、出産・育児によるIWMの更新可能性は明らかにできなかった。しかしながら、全体の12%においてIWMの変化が確認されたことから、IWMのある程度の可塑性があることが示された。

IWMの変化の要因を検討したところ、衰退群の養育者は、安定維持群の養育者に比べ、夫からのコンパニオンシップが少ないことが示された。しかし、夫のサポートへの満足度において衰退群は、安定維持群より有意に低いことから、養育者が夫婦関係に満足していないとサポートに気づかない可能性も示唆された。また、更新群の養育者は、不安定維持群・衰退群の養育者に比べ、夫からのサポートとの差はみられなかったが、夫婦関

係に満足していることが示された。したがって、夫からサポートを受けているという認知よりも、夫婦関係がうまくいっていると認知することのほうが、IWMの更新に影響を与えている可能性が考えられる。

以上のことから、夫からのサポートは、安定したIWMの維持要因にはなりえるが、不安定なIWMを安定したものに更新する要因としての効果は認められなかった。一方で、夫婦関係がIWMを安定したものに更新する要因となる可能性が明らかになった。

本研究では、出産前のIWMについて回想法を用いているが、現在のIWMや状況によって、回想された時の自身の認識は異なってくるのが考えられる。今後は、縦断的な研究が必要となってくるだろう。さらに、養育者のIWMによって、配偶者の選択も変化する可能性が考えられ、それによって、IWMの更新の制御要因になっていることも考えられる。したがって、今後養育者のみならず、夫のIWMも考慮した研究の必要があると考えられる。

IWMの更新のメカニズムについては、さまざまな研究があり、一貫した結果が得られていないのが現状である。そのため、今後質的研究を含む詳細な検討が待たれる。

(付記)

本論文は、平成22年に第21回発達心理学会大会において、発表したものを、加筆・修正したものです。調査にご協力していただきました養育者の方々、ならびに幼稚園の先生に深く御礼申し上げます。

引用・参考文献

安藤智子・遠藤利彦 2005 青年期・成人期のアタッチメント. 数井みゆき・遠藤利彦(編) アタッチメント—生涯にわたる絆— ミネルヴァ書房 pp. 127-173.

Bowlby, J. 1969/1982 *Attachment and Loss. Vol. 1. Attachment*. London: Hogarth Press.

(J. ボウルビィ, 黒田実郎・大場葵, 岡田洋子, 黒田聖一(訳) 1976/1991 母子関係の理論 I 愛着行動(新版) 岩崎学術出版社).

加藤孝士 2007 養育者への重要な他者からのサポートと内的作業モデルの関連 発達心理学研究, 18(3), pp. 185-195.

Main, M. 1991 Metacognitive knowledge, metacognitive monitoring, and singular (coherent) vs. multiple (incoherent) model of attachment. Findings and direction for future research. In C. M. Parkes, J. Stevenson-Hinde, & P. Morris (Eds.), *Attachment across the life cycle* (pp. 127-159). London: Routledge.

中尾達馬・加藤和生 2004 成人愛着スタイル尺度【ECR】の日本語版作成の試み 心理学研究 75, 154-159.

諸井克英 1996 家族内労働の分担における均衡性の知覚 家族心理学研究 10(1), 15-30.

Weinfield, N., Sroufe, L. A., & Egeland, B. 2000 Attachment from infancy to early adulthood in a high risk sample: Continuity, discontinuity, and their correlates. *Child Development*, 71, 695-702.